

生活隊

吉谷 仁志 (数理情報科学コース3年)



生活隊の目的は、キャンプ参加者全員が安全かつスムーズにキャンプ生活を行えるよう、サポートをすることです。主に、本部、ゴミ処理係、物品係、食料品係、点検係の5つに分かれて活動していました。キャンプに必要な物品や食料の手配だけでなく、スタッフに対して、薪の割り方や火のおこし方の講習会を行ったり、毛布のたたみ方やゴミの回収方法などについてのパンフレットを作成したりなどの指導も行いました。当日の仕事が多いので、各係だけでは人手不足でしたが、そこは生活隊全体で補い合っていました。表立つことは少ないですが、キャンプ生活を支える重要な役割を果たしたと思います。

フェロー

松岡 麗子 (生体行動科学コース2年)



フェローとは？ 21人のフェローが初めて顔を合わせたとき考えたことです。それぞれのフェロー観は様々でしたが、みんなに共通していたのは、まだ見ぬ06生を想って、“フェローをやりたい”という気持ちでした。仕事というと、細かいことはたくさんありましたが、要は“06生と一緒にキャンプをつくること”でした。具体的・客観的というより、抽象的・主観的に動く中で役割を見いだしてきました。こうしよう、こうしたい、こうしたほうがいい…常に21の個性のぶつかり合いでした。それでもフェローは同じ緑のジャンパーを着て走ってきました。飾りではなく、06生に最も近い所でフレキャンにのぞむ21人のパワーの源としてのジャンパーを着て。

## フレキャンに参加して

### キャンプファイヤーの瞬間

〈企画座スタッフ〉黒岩 京華

(生体行動科学コース2年)

ドンドン・パン、ドンドン・パン、…キャンプファイヤーの入場の曲が流れ始めた。フェローの松明に火が灯り、全員が輪になった。そして、花火が点火され、やぐらに火がついた。「成功だ！」…。私にとってこのキャンプファイヤーは不安でいっぱいだった。去年と違って、今年は企画する立場だったからだ。天気のこと、男女比のこと、ゲームの進め方、手落ちのない様にいろいろ話し合っ、何度もリハーサルをした。ゲームの司会中、マイクの故障や道具の不備な点などがあつたけれ

ど、みんなが助けてくれた。ファイヤーが成功で終わったときのみんなの笑顔は絶対に忘れない。長い間話し合ってきたことが、ほんの一瞬で終わってしまうと思うと、悲しいとかいう気持ちではなく、何かドキドキした。今年自分達の作ったキャンプの感動は、去年とはまた違ったものだった。



### 大切なこと

〈フェロー〉向原 真由

(自然環境研究コース2年)

フレキャンの頃の私は、いつもに増してどんくさかった。いろんな失敗をやらかしたし、やろうと思っていたのにできなかったこともあった。待ちに待った06がやって来て舞い上がっていたのと、一生懸命のあまり余裕を失っていたのかもしれない。フェローは新入生に直に影響するんだからしっかりしなくては、というもどかしさがついてまわった。本番が終わってしばらくは、もっとよくできたんじゃないかと考えた。でも、どんくさい分、忘れがちな大切なものを見失わずにいられた。



仲間がそばにいること、フレキャンは06自身がつくりあげるものだという事…。フレキャンという時が終わっても、それぞれが自分で手に入れた何かは残っているはず。それをこれからどう生かしていくだろう？そう考えたら、あれはあれで私なりのめいっばいだったんだから、まあいいか、と今は思ったりする。

### 僕がもらった感動

〈参加者〉藤原 裕弥 (1年)

僕の心に残った中で最も鮮明なものは、キャンプファイヤーでした。前半の楽しいゲームと後半の感動。21人のフェローがトーチを持って語るとき、僕は今にも涙があふれそうでした。特に僕のフェローのユキさん(写真)のときには、話に感動すると同時に準備期間中の苦労などが思い出されて目がうるんでいました。「やばい」と思い、急いで自分で自分の



足を踏んで、痛さで涙をこらえました。後で聞くとみんな少し泣いたようで、我慢して損した気分でした。今回のキャンプは僕にとっては生まれて初めてあんなに感動をくれた大きなイベントでした。

キャンプファイヤーの進行を考えた企画の人、トーチやファイヤーを準備した人、フェローを捕佐した多くのスタッフ、そして21人のフェロー。みんながいて初めてあの感動が生まれたんだと思うと、ただただみんなに感謝するばかりです。来年も多くの07生を感動させるフレキャンでありますように。

### ウォームファジーが作った出会い

〈参加者〉山本 ひろみ (1年)

フレキャンに参加して1番よかったと思うことは、友達がたくさんできたことです。最初はどやうやって友達を作ろうかと少し心配していたけれど、そんな心配はふっとんでしまいました。キャンプに参加しなければ、こんなにたくさんの人とは知り合えなかったと思います。そして、知り合いを増やすのに、一役も二役も買ったのは、ウォームファジーでした。準備期間中ウォームファジーを作った時には、ただの毛糸玉としか思えなかったし、去年のを見せてもらっても、実を言うと、何か変なの、とっていました。でも、自分のウォームファジーがどんどんカラフルになっていくにしたがって、自分の首にかかっているものがただの毛糸玉とは思えなくなって、





とても大事に思えてきました。何本あるのかわからないけど、あれだけの数の人と知り合いになれたんだと思うと、とてもうれしいです。フェローとスタッフのみなさんには感謝の気持ちでいっぱいです。キャンプファイヤーの時にはとても感動して、「来年は絶対にキャンプに参加するぞ」と思いました。

### どきどきわくわくのキャンプ

〈参加者〉 岩見 有紀 (1年)

フレキャンの顔合わせの日、いきなり同じ班になった人達と鍋をして、みんなとうまくやっつけそうなおもしろい。その日からキャンプまでほぼ毎日準備などに携わり、“これから素敵なキャンプが始まるんだ”と思って、どきどきわくわくしていました。当日は天気も良く、キャンプをするにはもってこいでした。お弁当を食べたり、みんなでご飯を作ったり、“ロマンスの神様”を踊ったり、オリエンテーリング、運動会等々どれも楽しいものばかりでした。キャンプファイヤーとミニファイヤーの炎、自分のフェローを胴上げしたことは、感動して脳裏に焼きついて



います。総科フレキャンで、総科はみんなが友達になることができ、とても居心地が良く、世界中の人に誇れるような素晴らしい学部であることを知り、ここにいられることをうれしく思います。来年も総科フレキャンに参加し、07生に今年のフレキャンの感動を伝えることができればいいなと思います。

### 2年越しの大イベント

〈参加者〉 水島 朝穂  
(社会科学コース・助教授)

初めて参加してみて驚いた。日頃おとなしくて自己主張がないと思っていた学生諸君が、フェローやスタッフとなってキビキビと動きまわっている。新入生に満足してもらおうとする企画とその進行(作戦)、全体の状況の的確な把握(情報)、食事を含むロジスティクス(兵站)…。あれだけの人数を1泊2日の日程で動かすには、マネージメント能力と周到な準備が必要である。個々の段取りの良し悪しは別にして、この準備課程に費やされるエネルギーはすごい。私が担当した新入生



達は、フェロー学生の下宿に泊まり込み、一緒に準備したという。キャンプファイヤーのクライマックス。彼らの目に涙が光っていた。「来年は、僕たちがフェローになって、次の新入生にこの感激を味わってもらおうだ」。このキャンプは、学生諸君にとっては、「(先輩に) やってもらい、(次の新入生に) やってあげて」ようやく完了する2年越しの大イベントなのかもしれない。



### フレキャンはオリキャン?

〈参加者〉 石井 好二郎  
(生体行動科学コース助手)

昨年度より総合科学部フレンドシップキャンプは始まった。それまで行われていた全学でのオリエンテーションキャンプが廃止になったからである。皮肉な言い方かもしれないが、オリキャンをフレキャンと名前を変えたのは正解だと思う。キャンプの中心は決してオリエンテーションにはなかった。中心とまでは言えないまでも、キャンプの核の一部分をフレンドシップが占めていたのは確かであったように思い出されるからである。そしてキャンプの間のスタッフや新入生は非常に立派であり、ルールや自分の役割を理解し実行していた。



しかしながら、その後もその姿を維持しているようには私には思えない。いくらキャンプで立派な行動や優しい言葉を示そうとも、それを維持できない者を私は決して信用しない。キャンプは異空間である。キャンプでの態度を俗世に戻ってきてからも維持できたとき、フレキャンはオリキャンたり得るのではないだろうか。

### 引き継がれるフレキャン

〈参加者〉 三浦 恵子  
(厚生補導係事務官)



日々の忙しきで、キャンプのことも今では遠い楽しい思い出となりました。思い出すことは、広島市こども村に着いて、キャンプ場の傍らのグラウンドが青空の下、白く眩しく暑かったこと。その静かな一隅があつという間にお祭広場に化したことに驚いたこと。夜の星空の下寒くて震えていたキャンプファイヤーも同じ場で行われました。夕食作りは文字通り、窯の熱と灰とすすと汗と涙の物語りでした。1つのことを協力して行動していく共同体験をして、共同体が作られていくのがわかりました。その中で、総合科学部入学生は、総合科学部生となり、1年後には頼もしいフェローとなって、年々と総合科学部を引き継いで、伝統をつくっていくことと思われまふ。来年を楽しみにしています。





# 【学生 つくる 大学 西条】

総合科学部が西条に移転して一年半が経ちます。でも、学生の間にはまだまだ不満があるようです。そこで私たちはまず学生の不満をそのままの形で取り上げました。次に大学側・地域側がキャンパスづくり・まちづくりをどのようにすすめるか、また今後どのような計画があるのかを調べました。そして最後に学生参加のまちづくり・キャンパスづくりの方向を探ってみました。

## 1. あなたの不満を聞かせて下さい。




生協ってわりには、食堂の値段結構高いよな。

食堂の行列って長すぎるんだよね。食べるだけで昼休み終わっちゃうじゃん。

食堂が閉まるのが早すぎるわ。6:30じゃあ晩飯食えんって。

自動販売機が少ないんじゃない？生協までは遠いしな。



だいたいね。この熱いのに冷房きかんのは間違ってる。冬は冬で寒いし。




ごみはきちんとごみ箱へ。今からではいるけどね。ちよとごみ箱少ないよ。



レポーターの巻尾です。私にあなたの不満をぶつけて下さい。おねがい!!



水道が欲しいな。今トイレにしかなくて。とても不便だわ。



JRの終電の時間絶対早すぎると思うんよ。あれじゃあ、夜中ぐりと友達と遊べない。



バスが少ないから駅まで1時間も待たなきゃならない。土曜と休日は特に困るわ。

歩道がないから危険よね。ラッシュの時なんて、おすりすりでごわいってらないわ。



買い物は西条に期待してないもん。広島まで出るの。西条じゃあ欲しい物も買えないでしょ。




遊ぶ所がない。行くといていうとXXボールとかカラオケとか。刺激が足りんよ。

バスの運賃さーちよと高すぎるよな。定期もあり安くはないし。だから原付にしたんだ。



食べ物屋や飲み屋に苦学するよな。近くにはないし、第一種類がないよ。



街灯が少ないから。暗くてごわいんだって。この間なんか溝にはまったぞ。

オホホホ!!  
これは、6月の17日に学内で学生を対象に行ったアンケートの結果ですわ!!  
その中で「不満の多かったもの」をとり上げましたの。  
オホホホ!!





## 2. これでも去年とは大違い & 今後の整備計画は？

さて、先述の通り不満がでている事は事実だが、我々はこの総合科学部が移転後まだ1年余りしかたっていない事にも注目する必要があるのではないだろうか。そして、移転後の大学及び西条地域の整備に対して大学側・地域側はどう対応しているのかにも注意をはらう必要があろう。そこで大学側・地域側のこの移転後1年間の対応、そして今後の対応をみていくことにしよう。

### 【学内】

昨年（1993年）移転当初は土肌もむきだしだった広場や通路も、種々の整備計画により、今では広場は煉瓦舗装され、植樹が施されてきている。これらの内、総合科学部が担当したのはどの様なものなのだろうか。整備委員長の嶋屋典彦教授（地域文化コース）に聞いたところ、以下に示すようなものが挙げられた。



駐車場・駐輪場も整備されたが…

- ・総合科学部構内（メインストリートを除く）の植樹—昨年11月の学生に対して行われたアンケートを基に—
- ・ベンチの設置（K棟前、事務棟・西図書館前及びスペイン広場）
- ・講義棟内及び講義棟玄関前のごみ箱及び灰皿の設置
- ・総合科学部構内への二輪車及び自転車等の流入を規制する車止めの設置
- ・西体育館の整備（ミーティングルームへのAV機器の設置、トレーニング器具の拡充）

更に学生部でも構内の煉瓦舗装や駐車場・駐輪場の整備や、学生用掲示板の設置等を行ってきている。この様に、大学側は予算の許す



講義棟前に設置されたベンチ

限り整備に力を入れている事は明らかである。そして更に、正式決定は今年度国家予算の成立を待つ必要があるが（筆者注：取材時点で予算未成立）、今年度も以下に挙げること等の整備が行われる予定である。

- ・K棟、J棟へのウォータークーラー（冷水機）の設置
- ・スペイン広場へのごみ箱の設置
- ・駐輪場の屋根の設置（一部）

しかし、現実問題として総合科学部はただ単に総合科学部生のみが出入りする学部ではない事も見逃せない事実である。その性質を考えたとき、果たしてごみ箱などのキャパシティは充分なのだろうか。またこれからますます進むと思われる自動車・バイクの普及への対応及び学校教育学部・法・経済学部の移転への対応は果たして充分か、講義棟の猛暑対策はどうか等疑問点も決して少なくないと思われる。そして、忘れてはならないのは、せっかく整備・配置されたものをいかに有効利用していくかは学生自身にかかっているということである。

### 【学外】



日替り定食490円

総合科学部による学外の生活及び学習環境に対する整備計画は今のところ無いが、東広島商工会議所と東広島まちづくり商業委員会が「下見学生街構想」をうちたて、進めている。これによると、下見地区のうち下図に示した地域が再開発され、学生と住民が共存できるまちづくりが行われる予定である。町の形としては核テナントをもったショッピングモールと随所に設けられた公園が中心となり、学生は勿論のこと地域住民にも充分に活用できるものになるようである。しかし、これについては現段階ではあくまで「構想」であり、これから先、用地の確保や、テナントの誘致、周囲の自然環境への配慮等クリアすべき問題が山積している。従って仮にこれらの問題が順調に解決されたとしても、実際に街の建設が始まるのは1998年になる模様であり、現

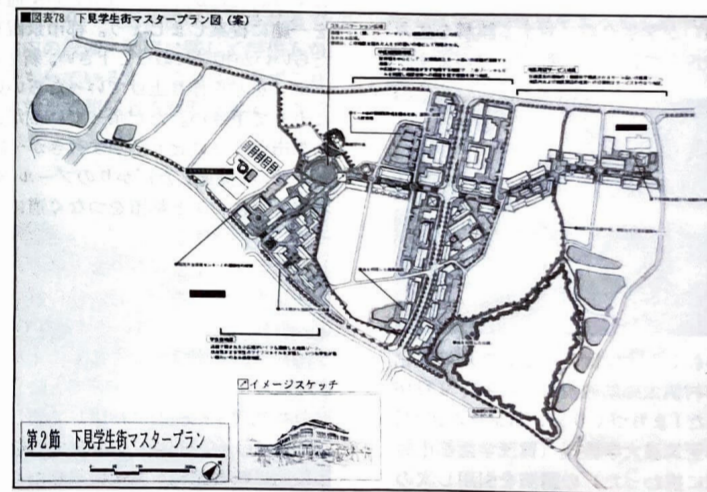
在1年次に在籍している学生でさえも順調に4年間で卒業した場合の「下見学生街」の恩恵にあずかることは無いのである。また、下見地区以外の地区、例えば田口、郷曾、八本松地区などに目を向けると、整備構想すらもちあがっていない。学外の生活環境の問題は「下見地区学生街」に限らず、より広い視野に立って進める必要があると思われるのだが、どうだろうか。

最近、いくつかの飲食店が雨後のたけのこの様に開店し、書店・娯楽施設なども需要に従って増えてきてはいるが、無秩序な開発に終始してはただ「便利な」だけの街になってしまうのではなからうか。そうならないためにも、広い視野に立った整備計画がやはり必要だと思われる。

（学生編集委員：谷瀬茂樹、藤原友晴）



書店の上にゲームセンターとは!?



下見学生街構想モデル図



### 3. キャンパスづくり・まちづくり参加宣言

1では学生の半ば自分勝手な不満をそのまま取り上げ、それに対し2ではあまり学生との対話のない中で行われた環境づくりを取り上げました。ここではよりよいまちづくり・キャンパスづくりをめざす方法を探ってみたいと思います。

◎まちづくりに学生も参加しましょう。

「好き好んで移転して来たわけではない」大学側と「頼んで来てもらったわけじゃない」地元側。お互いのコミュニケーションなしにひたすら突き進んできた学園都市建設。このままではいけないことに多くの人が気づきはじめています。

総合科学部が西条に移転して、はや一年半が経ちましたが、飛翔44号で東広島青年会議所理事長の宝積良忠さんが憂慮したこの事態は未だに変化の兆しが見えないようです。ここではまず総合科学部の西条移転を特集した1993年1月発行の飛翔44号を中心に地域側、大学側からの声をふりかえってみます。

地域を宝積さんは、「地域の活性化を喜ぶ反面、非常に急激な都市化に不安」を抱き、「市街化調整区域には安普請の学生向けアパートが雨後の筍のごとく林立して都市景観は台無しになり」また「地域とのコミュニケーションがないため、一部学生の傍若無人なる振る舞いが学生全般に対する誤解を生みかねない状況」であると、批判しています。



一方、移転した大学側の声として地域文化コースの吉村慎太郎助教授は、1992年9月16日に開かれた「まちづくりシンポジウム1992」での土肥博至筑波大学教授（賀茂学園都市開発基本構想に携わった）の講演を引用し次のように述べています。学園都市の条件は①人

間、特に学生を暖かく迎える②豊かな自然の存在③おしゃれな、若者が楽しめるまちということだが、②は現状で申し分なく、取えていけば、開発の行き過ぎから自然破壊の危機の方が大きい。さらに①では学生自身の側での町に対する思いやりの必要性も問題であると主張しています。

学生側からは、自然環境の豊かさに居心地の良さは感じてもらう生活面において西条の不便さを口々にもらしています。しかし、上のような意見に触れると自分が積極的にまちづくりに参加するどころか、一人暮らしで自分の行動に無責任なためかなり勝手な振るまいをしていることに気づかされるかもしれません。

私達が提案するのは、学生が積極的にまちづくりに参加する意識をもつことです。ここでもう一度宝積さんの文章を引用します。

「スーパーマーケットが近くにないなら早期誘致のための運動を一緒に起こしましょう。商店街が時代遅れなら一緒に要望書を作りましょう。交通が不便なら新しい交通システムを一緒に提案しましょう。都市景観をどうしたらいいか相談のつて下さい。新しいコミュニティをどう作り上げていったらいいか一緒に考えて下さい。ただ余っているだけの自然を都市づくりにどう活かすべきか一緒に考えて下さい。開通したばかりのプールパルが、名実ともに大学と都市をつなぐ道になるように一緒に努力しましょう。」

みなさん、不満ばかりならべていては何も解決しません。この呼びかけに参加し、よりよいまちづくりをめざしてはどうでしょうか。

例えば、映画館がなくてもフィルムやビデオを借りて下見福祉会館等で上映会をやるなど公共施設を積極的に活用して楽しんだらどうでしょうか。それでも満足できなかったら市役所に映画館の設置を要望したりしましょう。



◎キャンパスづくりに参加しましょう。

学内においても事情はかわらないようです。「ゴミ箱が少ないという学生の不満もあるが、西図書館前の階段（通称“さる山”）には空き缶や弁当殻、タバコの吸い殻等が数多く散乱している。ゴミ箱はL棟の入り口にあるのだからそこまで持って行って捨てればいい。大講義室前のゴミ箱が小さいというがそこは弁当がらを捨てるのではなく、L棟1階の入り口に弁当がら用のゴミ箱があるからそこに捨てるべきだ。」「駐車場も満車になる事はなく、学生の不満はただ校舎に近いところに欲しいというだけだ」といった話は学生の公共物に対する態度の甘さを明確に指摘していると思われます。これについてはまちづくりのところで述べたのと同じように学生のキャンパスづくりへの積極性が要求されるでしょう。学内の設備・制度に関して学生もかなり不満をもっているようですが、まずこれらのことに対して節度ある態度を示すべきでしょう。



一方、学内には学生の節度ある態度だけでは解決できない問題もいくつかあります。まずは教室に冷房が効いていないため授業を快適に受ける条件が整っていないことです。「冷房は、L棟教室など外部に音がもれないように窓を閉める場合はきかせているがそのほかは我慢してもらうしかない。暖房はあるから冬は大丈夫」という大学側の見解は私達が快適に教育を受ける権利を無視しているものと言えるでしょう（昔より良くなったという議論は論外です）。



こういったことは他の国立大学ではどのように解決しているのでしょうか。大阪教育大学では学生の意見をまとめて教職員と話し合い、380段の階段にエスカレーターを設置を実現しました。このように学生、教官、職員相互のコミュニケーションを密にすることにより、キャンパス環境を改善していくことが必要だと思えます。

以上、学生もまちづくり・キャンパスづくりに参加しようということを述べてきました。これを機会にまちづくり・キャンパスづくりの論議が盛んになることを私たちは望みます。ともに盛り上げていきましょう。

（学生編集委員：篠崎陽平、岩本信治）



## 4. 社会からの声：大学移転・その後

平原 秀則（社団法人東広島青年会議所理事長）

'92年度宝積理事長が本誌に「歓迎・総合科学部移転」の一文を寄せてから既に2年が過ぎようとしています。

この間も、絶え間なく東広島は変わり続けて来ました。総合科学部移転後、朝夕の駅舎には若者の姿が以前と比べてずいぶんと多くなりました。また、一般に「学生アパート」と呼ばれるワンルームアパートの数は需要を上回るほど増加し、さらにプールボール浴いには若者をターゲットとした店舗がいくつか開店しました。下見学生街の整備も、関係者のご努力により着々と進んでいます。

大学や学生からのまちに対する働きかけも、以前に比べ積極的になりました。大学祭や市のイベント、学園都市づくり交流会議などの組織を通じた人的ネットワークも随分と広がってきたのではないかと思います。

つまり、大学と市民が協力してすばらしい学園都市を形づくって行くための下地づくりが、今やと始まったばかりのところだと言うことができそうです。

しかしながら、日常生活に目を向けてみると、住民も学生も教職員もそれぞれ多くの不満を抱えています。都市基盤整備の遅れもその一因だとは思いますが、日常生活レベルにおけるお互いのコミュニケーション不足や、学園都市東広島にふさわしいライフスタイルを見いだせないことなど、ソフト面の問題もかなりのウェイトを占めているのではないのでしょうか。



東広島を含む賀茂台地は元来豊かな農作地帯であり、そのコミュニティは昔ながらの地縁血縁を大事にする村落共同体的なものでした。旧住民からの不満や要望の多くは、都市化の洗礼を受け、村落共同体的の基となっている住民の均質性が崩れさるうとしている今、

新しいコミュニティの形が見いだせなかったりなじめなかったりすることが原因となって、様々な形で噴出しているのだと言うことができると思います。

さらにそういった不満や要望は、『まちづくりフォーラム1992』において土肥博至筑波大学教授が指摘されたように、いわゆる住民運動（反対のための反対も含め）とはならず、行政に直訴するという旧態依然とした形で行われていました。それは村落共同体の時代には普通であったことなのですが、新住民には非常に不透明な感じで受け取られてしまうという状況にあります。

次に、学生教職員からの不満の要素として、現在の大学周辺の状態を、千田キャンパス周辺の、長年つちかわれた学生街とついつい比較してしまうことから起きているものも、まだかなり多いのではないかと思います。これについては、'92年度宝積理事長も述べていたように、むしろ積極的に学生街づくりに参加していただくことが、解決の糸口になるのではないのでしょうか。

そのほか学生の側の問題として、学生が関わる交通禍の増加も、住民の間に迷惑感情を起こさせる大きな要因の一つとなっています。無謀運転などは論外ですけれども、狭く見通しの悪い道路が多い当市の現状に鑑み、交差点での安全確認や、無理な追い越しはしないなどの、ドライバーとしてのルールは厳格に守っていただきたいと思えます。

さらに市民としてのルールも重要です。タバコの投げ捨てが若い人に多く見受けられるようですし、学生さんはゴミの分別をしてくれないという苦情もよく聞きます。一部の学生の心ない行動が、学園都市づくりに尽力している多くの人々の足を引っ張っていることに気づいて下さい。



マイナス面ばかりを書き連ねてまいりましたが、反面それらはまたこの地域の過去と未来を支える重要なファクターでもあるわけです。たとえば、賀茂台地の緑に映える赤瓦の美しい田園風景画、まさにその旧弊なムラの体質によって支えられてきたという事実は見落とせません。そして、これからの新しい文化は、若者の奔放とも言える感性から生まれるものです。

結論として、今後の学園都市づくりはそれらの要素をいかに調和させるかということにかかっているのではないかと思います。

「調和」とひとことで言ってしまうは簡単ですが、田園風景と新しい学生街の景観上の調和、学生達や新住民と一般的な兼業農家のライフスタイルにおける調和、大学と県・市の行政レベルにおける調和など、多面的な視点が必要であり、またそれぞれの視点ごとに多くの問題が横たわっています。

私達JCは、その問題を解決する鍵は「対話」であろうと考えています。街にかかわる人々が、お互いにコミュニケーションを緊密にすることによって、学園都市東広島における新しいライフスタイルが、醸成されていくのではないかと思います。

私達は昨年学園都市の先輩であるつくば市を視察して参りました。つくば市は周辺農村部と新市街地がはっきりと区別されているため、新住民と旧住民はあまり干渉し合わないで暮らして行けるようでした。しかし、東広島市は大学が市域にしっかりと根を下ろす構造になっています。

これは都市計画の手法上の違いであって、どちらが優れているということではありません。ここで重要なのは、東広島ではまちづくりにおいて大学・学生と住民のコミュニケーションが特に必要だということと、学生の住まいがまちに散在しているため、住民との個人的なコミュニケーションが、とりやすい環境にあるということです。

そしてまた、コミュニケーションが必要であるということは、今後の都市づくりにおいて私達市民が手がけなければならない部分が大きなウェイトを占めているということです。

いま私達JCなどのまちづくり推進団体に求められているのは、そのコミュニケーションのお手伝いをするのだと思います。つまり、まちに住むいろいろな人々が自由に交流できる場を準備しなければならないと考えています。それはイベントであったり、市民会議のようなものであったり、先頃私達JCが提唱したまちづくりセンターのようなものかも知れません。



しかしながら、私達が場を設定しなくても、学生の方々には今すぐできるコミュニケーションがあります。あなたが日常会う近所の人に笑顔で挨拶することです。なんだと思われるかも知れませんが、どんな催しや設営より、それこそ古今東西を通じて「対話」の扉を開く最も効果的なやり方です。

このまちで暮らす数年間は、たった数年間に過ぎないかも知れませんが、あなたの人生にとって大切な数年間であるはずで、どうかこのまちや人々と関わりながら、このまちの市民としていきいきと暮らして下さい。

東広島市が、一度でもここで暮らした人々にとって心の故郷となるよう、私達も日々努力して行きたいと思っています。

最後に、以前開催した座談会で、ある主婦の方が言われた言葉をご紹介します。

「…自分の息子や娘が他所の大学に行ったとき、その町の人にどんなふうに接してもらえたら嬉しいか考えながら、このまちに来た学生さんにも接して行きたいと思います…」